

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	島の觀世音 : 長詩 : 文苑
Author(s)	白月
Citation	龍南會雜誌, 1 2 2 : 5 4 - 5 5
Issue date	1907-10-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6064
Right	

その興醒むと小兎か
 落葉の音にふりかへる
 忍ぶ姿のをかしさを
 透かしても見る萩の花かけ

(完)

島の觀世音

白 月

北玄海のたゞ中に
 盤石太古成りしまよ
 嚴然遂に動きあぐ
 聳わて高き烏帽子島
 その頂に安置れたる
 觀音佛の立姿
 露が月より流し來る
 苔、彩どりて御衣

み佛なれば朽ちもせず、
 北は千里の大洋や
 水、雲、空の七つ色
 光りを浴びて立ちたまふ

南より來る春の鳥
 秋かへり行く鳥の影
 送り迎ふる幾春秋
 遂に倦んするさまもなし

齡無窮の觀世音
 妙ある相、荒海に
 むかひ立ちたる千歳の
 慈眼はつねに耀きて――

離れ小島に花もあぐ
 松こそ響け潮風に
 海の高音とまじはりて

他界の調幽しらべかすかある

かの南極の地の軸に

三更起る子規

眞一文字に北の端

氷の中に消ゆるとき

天空そらや無際の聚樂殿

銀燭、星の數知らぬ

一つの星の紅に

光りするごとく流れ去る

みずや螢の青淵に

映るが如く飛ぶ如く

慈眼の下に大洋を

静かに渡る月のさま

汚れし星を洗ふごと

汐吹きあぐる大鯨

美しけれどが弱くて

濤に捲かると流れ星

あるひは見すや北海に

流れ寄せ來る黒潮の

灘に籠めたる大霧の

さ搖ると風を起すとき

威神の力巍々として

み佛あればにこやかに

永久とこひ幽明ゆうめいの間より

奇しきすがたを見てねはすかあ